

信州・上田 今昔散策マップ

● 旧北国街道 ● 公共トイレ

● 参考文献／上田市誌 人物編 (上田市教育委員会)

信州上田が誇る偉人達を想い、城下町上田をぶらり散策



石井鶴三
Ishii Tokuji

美術の広い分野で
本格独自の造形性を高めた
美術家

(1887-1973/美術家)

大正13年に小県上田教育会の招きにより上田に訪れた石井鶴三は、上田彫塑研究会の主催で46年もの間講師を務め、上田の造形美術に大きな影響を与えました。

- 小上教育会館上小教育会内、石井鶴三美術資料室があります。
- サントミュージゼ 上田市立美術館に常設展示



久米正雄
Kikumasa Masahiko

緑が丘一丁目

(1891-1952/作家)

上田尋常高等小学校長である久米由太郎の次男として生まれる。上田を舞台にした小説「父の死」を発表しました。久米は、父の死への強烈な記憶と責めを負って自刃という武士道教育からでた虚栄を題材にした小説です。

- 上田商工会議所前に標があります。



赤松小三郎
Akasaka Sanjuro

中央東

民主的議会を提案し、イギリス式の兵法を日本に取り入れた

(1831-1867/兵学者・政治思想家)

上田藩士赤松小三郎は、幕末、諸外国から開国を迫られた日本の世情が不安定になった際、公武合体をし新しい政治体制を取り入れるべきだと松平春嶽に建白をし、近代国家誕生に大きな影響を与えました。

- 遺髪墓は鍛冶町の月窓寺にあります。
- 上田城跡公園、愛の鐘前に小三郎の弟子である東郷平八郎が揮毫した小三郎の顕彰碑があり、赤松小三郎記念館もあります。
- 赤松小三郎の高札があります。



加舎白雄
Kawanishi Hakuseki

俳句の改革と上田の庶民文化を高めた、江戸後期の俳人

(1738-1791/俳人)

白雄は松尾芭蕉風の俳句を正統なものとし、その復興と主情的な俳句をもって新時代の俳風を打ち立てました。娘捨山長楽寺に芭蕉の句碑をはじめて建立。

- 生家跡と歌碑が上田城跡公園わきにあります。
- 大輪寺に句碑



山本鼎
Yamamoto Kamekazu

明治生まれ、創造と自由を追求した大正時代の芸術家

(1882-1946/洋画家)

山本鼎は児童自由画教育、農民美術運動などを手がけた運動家であったとともに、創造的で自由を尊ぶ大正時代を象徴する生き方を貫いた芸術家。

- サントミュージゼ 上田市立美術館に常設展示
- 大輪寺に墓があります。



ハリ・K・シゲタ
Harrier K. Shigetake

(1887-1963/写真家)

明治20年7月、原町に生まれた彼は15歳で渡米し、ミネソタのセントポール美術学校に入学。当時、芸術写真家が商業写真家を見下す傾向にあったアメリカの地で、持って生まれた手先の器用さと大胆な発想力で双方を融合した写真技術を確立しました。

- サントミュージゼ 上田市立美術館に常設展示



山極勝三郎
Yamaguchi Sanjuro

世界初の人工癌実験に成功する

(1863-1930/医学博士)

世界初の人工癌発生の実験に成功。「癌出来つ意昂然と二歩三歩」これはその時の感激の句作であるといわれています。この偉業は、ノーベル賞候補になりましたが、当時の日本の国際的な地位などの事情で、選考もれになってしまいました。

- 碑と胸像は上田城跡公園に、胸像は上田市立第三中学校にも建てられています。
- 生家が残っています。

山本鼎
石井鶴三
ハリ・K・シゲタ

(1811-1864/教育者)

明倫堂で文学・武道を学んだ上野尚志は、上田藩主松平忠優に対し上田の未来を考える急務五条を提出するも、「人心を惑わす」として塾居(ちつきよ)を命じられる。その後、小県郡年表に取りかかり、生涯をかけて完成させました。

- 生家跡には当時の庭が残っています。
- 上田城跡公園には石碑があります。



三吉米熊
Sanjuro Mitsu

近代日本の養蚕教育の先駆者

(1860-1927/農学博士)

動乱の幕末。坂本龍馬と親交が深かった長府藩士三吉慎蔵の長男として生まれた米熊は、明治14年に長野県に就職。勸業課農務掛、蚕糸王国長野県農務掛を通じて積極的に技術・知識を習得。蚕糸業の指導力をかかれた米熊は、小県郡立蚕業学校(現上田東高等学校)の初代校長。また信州大学繊維学部設立にあたり、文部省の委嘱により、設立委員を務めるなど、蚕業教育の発展に尽くしました。

- 上田城跡公園に胸像があります。

0 100 200 300 400 500m

至田高平インター

18

141

信州大学 繊維学部

踏入二丁目

願行寺

願行寺は真田昌幸が、天正14年(1586)海野郷(うんのごう)(東御市)から上田城下町の厩裏(うまやうら)に移したと伝えられ、その後元和7年(1621)二代目上田城主真田信之(信幸)によって、海野町の東方へ移されました。その時この**四脚門**も、そのまま移転されたと伝えられています。

月窓寺

永禄元年(1558)常田隆永が常田に堂宇を建立したのが月窓寺のはじまりだそうです。第一次上田合戦で焼失し、その後この鍛冶町に再建されたそうです。
真田信繁(幸村)の**法名は月窓伝心**というそうです。そのため幸村が月窓寺を再興したともいわれています。寺号も伝心山月窓寺から伝叟山月窓寺となったそうです。

向源寺

永禄9年(1566)武田信玄は、上田原の地にあったこの寺に陣を取ることを禁じた朱印状を出しています。この朱印状は市指定文化財となっています。
また、俳人・**小林一茶**は江戸に赴く前の数年間をこの寺で過ごしたそうです。第十四世の換沼氏は学問の長である寮司(りょうす)という立場にあったそうです。和歌もたしなんで一茶とは親交が深かったようです。

海禅寺

戦国時代、武田信玄が小県郡を平定したとき、まず願文を捧げたのは、名生島足島神社と、この開善寺でありました。
その後、天正年間、真田氏の上田城築城に当り開善寺は、城の東北(鬼門)に移され、海禅寺と改称、**上田城下町鎮護の寺**となりました。以降四百年その間、学問所が設置され、談林所としての役を果たし県下真言宗の名刹として今日に至っています。

城下町・信州上田の人標

城下町上田へ 風流都市文化をもたらした殿様 松平忠愛^{ただかね}(七代城主)

出石から上田へ入部した忠周の嫡男。江戸では吉原通いの度が過ぎて隠居させられたとか、国元では東海道五十三次の趣向の五十三の部屋からなるお茶屋御殿を造って遊び歩いたとか、とかく評判が悪いが、江戸文化を上田に根づかせた功績は大きい。寛保の大水害の折りには流れた死者を葬り塚を築き、施餓鬼法要を行った優しい殿様でもあった。お茶屋御殿の遺構といわれる建物が、本町に2棟残っている。

幕末・開国と信州上田 上田の熱き想いで時代を変えた男、 松平忠優^{ただかた}(忠固)^{ただかた}(十一代城主)

播磨姫路藩主の次男として生まれた忠優は17歳の時に上田藩主、松平忠学の養子となり、家督を継ぐこととなる。



寺社奉行、大阪城代を経て老中に抜擢された忠優。ペリーの来航、そして開国要求はその5年後に起こる。

老中首座・阿部正弘が諸大名や朝廷から意見を求め、徳川斉昭に海防参与を命じた事に真っ向から反対し、開国論を唱えた忠優は、時の幕府より老中職を解かれてしまう。

しかし、正弘は志半ばでこの世を去り、後事を託された堀田正睦は日米間の条約交渉を共に推進する同志として、開国派の忠優を老中として復帰させる決断をした。その際、忠優は、忠固と改名している。

日米交渉における忠固のスタンスは一貫していた。当時、破竹の勢いでアジア諸国を植民地化しつつあったイギリスの艦隊が日本に襲来する前に、相対的に穏当な交渉相手であるアメリカのタウンゼント・ハリスとの間で、少しでも日本に有利な内容の条約を結んでしまおうというものであった。そのためには朝廷の勅許などは待てられなかった。その強い意志で井伊直弼に条約の調印を決断させたのは忠固であった。

しかし、条約の調印から4日後、忠固は老中を免職、蟄居を命じられた。安政の大獄の始まりである。

また、日米修好通商条約の調印に先立ち、安政4年(1857年)忠固は産物会所を国元と江戸に設置し、上田藩の特産品であった生糸を江戸へ出荷する体制を作り上げ、生糸輸出を準備させていた。横浜開港と同時に生糸の輸出を始めたのも上田藩であった。その後、明治から昭和初期まで生糸が日本最大の輸出品として日本経済を支え続けたことを考えると、開国を見据えた忠固の先見性は確かなものであったことが分かる。

安政6年9月、忠固は急死。享年48歳。彼の死は謎に包まれている。

しかし、彼の想いは家臣の赤松小三郎をはじめ信州上田の人々に受け継がれていく。

- 上田市立博物館にゆかりの品が展示
- 願行寺に遺髪を埋葬した墓があります。

歴代上田城主

1代 真田昌幸 天正11年(1583~1600)	8代 松平忠順 寛延2年(1748~1783)
2代 真田信之 慶長5年(1600~1622)	9代 松平忠清 天明3年(1783~1812)
3代 仙石忠政 元和8年(1622~1628)	10代 松平忠学 文化9年(1812~1830)
4代 仙石政俊 寛永5年(1628~1669)	11代 松平忠優 ^{ただかた} 天保元年(1830~1859)
5代 仙石政明 寛文9年(1669~1706)	12代 松平忠礼 安政6年~明治2年(1859~1869)
6代 松平忠周 ^{ただかた} 宝永3年(1706~1728)	
7代 松平忠愛 ^{ただかね} 享保13年(1728~1749)	

※初版 平成27年6月
第2版 平成28年10月

●お問い合わせは

上田・城下町活性化会

〒386-8522長野県上田市大手一丁目10番22号(上田商工会議所内)
TEL.0268-22-4500(代) FAX.0268-25-5577
URL <http://www.ucci.or.jp/jokamachi/>

信州上田が誇る
偉人たちの足跡と
真田三代の
上田・城下町を巡る

信州・上田 今昔散策 マップ



赤松小三郎
Akashiwa Kōsaburō



山本鼎
Yamamoto Tadamasa



三吉米熊
Mijikami Kuma

編集・発行

上田・城下町活性化会

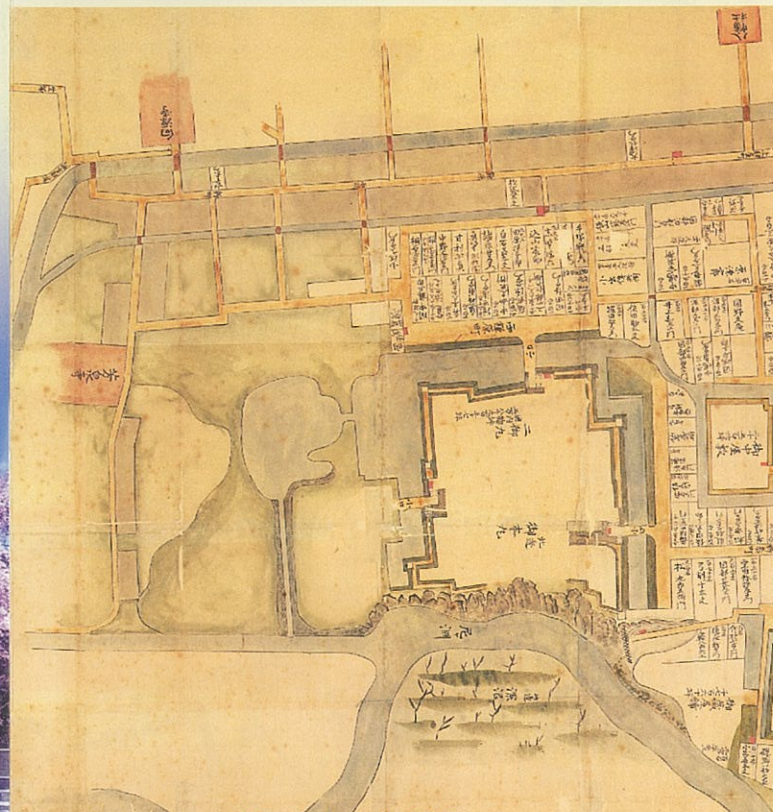


大輪寺

かつては神科村畑山(現上田市)にあり、天文年中兵火により焼失。上田城築城後に、真田昌幸の正室、信之、幸村の母である**寒松院**の発願により、上田市新田(当地)に再建されました。
寒松院は慶長18年(1613)6月3日に没し、大輪寺墓地に葬られ位牌も祀られています。中門、天照山の額は松代藩主真田幸貫の筆によるものです。

日輪寺

天照山「日輪寺」は曹洞宗のお寺です。山門の奥の正面には**普門閣**とよばれる観音堂があります。
寺の名前は真田氏の本家にあたる海野氏の海野幸義公の法名日輪寺殿に由来しているそうです。
真田氏の上田城築城に当たり、海野郷(現東御市)からこの地に移されました。



信州・上田 真田家ゆかりの寺 城下町上田絵図

●資料提供/上田市マルチメディア情報センター

金昌寺

もとは武石村(現上田市)にあり、琴松寺と呼ばれていたそうです。真田昌幸が援助してこの地に移転し、鳳林山金昌寺としたそうです。
境内に**聖徳太子堂**があり、太子像がまつられています。幕末の名工 竹内八十吉の彫刻があります。

芳泉寺

真田信之の正室、**小松姫**は、信之が菩提寺としていました「常福寺」(現芳泉寺)に葬られました。芳泉寺本堂裏の墓地に建てられているりっぱな**宝篋印塔**が、小松姫の墓です。石塔の高さ3m余、塔身と下壇の石に姫の経歴が刻まれています。その終わりに「元和七年三月廿四日施主信之」と記されています。

また江戸時代初期、初の藩主となった仙石家の墓もあります。